

波多利朗の Funky Goods

「灯台下暗し」とは、このこと 香港製謎パー機「PTP-20」は 東京・墨田にあった！

注1)株式会社ロジックラフト

東京都墨田区にある通信販売会社。他店ではなかなか見かけない特徴ある製品を扱っている。今回購入したPTP-20の他に、PTV-30も取り扱っていた。しかし、香港の電腦中心を探し回っても入手できなかったパームトップパソコンが、日本で居ながらにして購入できてしまうのだから、いい時代になったものである。

同店では、PTP-20を、3万9800円で販売している(シリアル/パラレル拡張モジュール付き)。また、1MBのSRAM Card付きのセットも用意されており、こちらのほうは5万3800円である。一方、PTV-30は、本体のみの価格で4万8000円である。

連絡先は、以下のとおり。
〒130
東京都墨田区東駒形1-4-10
TEL: 03-3621-7237
FAX: 03-3621-7223
株ロジックラフト

筆者は前回の香港旅行の際、いわゆる謎パー機と呼ばれるパームトップパソコンがないかと探したが、結果は思わしくなかった。特に、Group Sense Limited社が製作する中国製パームトップパソコン、PTP-20を探してうろついたのであるが、どのショップでも見かけることができなかった。

ところが帰国後、株式会社ロジックラフト(注1)で同製品を取り扱っていることを知り、さっそく購入した。これで行やく、筆者のパームトップコレクションは、現在発売されている機種のをほとんどを網羅することができた。

そこで今回は、このPTP-20パームトップパソコンの製品紹介と、日本語化について述べたい。

本来ならば、前回の記事の続きとして、Psion関連グッズの紹介を行う予定であったが、これは次号に回すことにした。Psionファンの皆さん、ゴメンナサイ！

兄弟分(PTV-30)とは似ていない！

PTP-20は、香港のパソコンメーカー、Group Sense Limitedが製作し、Instant Techブランドで販売しているパームトップパソコンである(写真1)。同系列の製



写真1 PTP-20

品であるPTV-30は、本誌上でも紹介されたことがあるので、ご存じの方も多いのではなからうか。

PTP-20とPTV-30とは、兄弟みたくないものである(注2)、外観はかなり異なっている(写真2)。PTV-30は、タッチタイプ可能な82キーのキーボードを持ち、PCMCIAカードスロットも2基用意されているため、かなり大きく、かつ重い。

一方PTP-20は、雰囲気的にはHP200LXに似ており、華奢でおしゃれなデザインだ。キーボードはボタンタイプであるが、HP200LXよりは大きいので、若干押しやすい。しかし、PTV-30と比べると、タイピングはかなり困難である(注3)。PCMCIAカードスロットは、本体が小さいため1基しか内蔵されておらず、このあたりの拡張性も劣るが、反面小型化と軽量化が図られて

項目	PTP-20	PTV-30
CPU	V20	V30
クロック周波数	14MHz	7.16MHz
RAMメモリ	2 MB	2 MB
PCMCIAスロット	PCMCIA Type 2 × 1	PCMCIA Type 2 × 2
ディスプレイ ドット数 有効エリア	CGA LCD Display 640×200 124×46mm	CGA LCD Display 640×200
キーボード	80Keys	82Keys
I/Oポート	1P1S (拡張ボックス使用)	1P1S
電源	単三乾電池2本 CR2025リチウム電池 9V ACアダプタ	単三乾電池2本 CR2025リチウム電池 7.5V ACアダプタ
重量	350g(電池を含む)	600g(電池を含む)
外形寸法	99×177×19.8mm	116×235×31mm
内蔵ソフトウェア	MS ROM DOS5.0 専用PIM 表計算ソフト	MS ROM DOS5.0 MS-Works2.0 表計算ソフト Text-to-speech

◎表1 PTP-20とPTV-30のスペックの比較

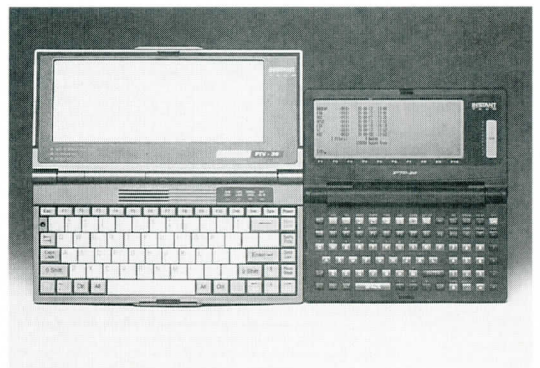


写真2 PTP-20(右)とPTV-30の比較。兄弟というには違いすぎる外観となっている

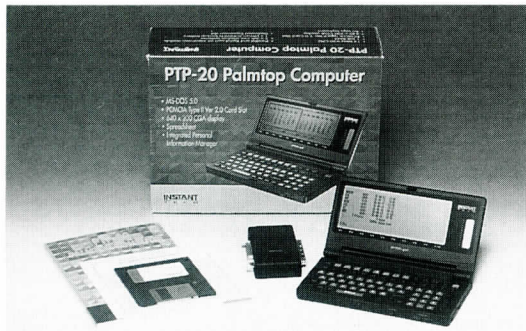


写真3 PTP-20の商品構成

いるため、持ち運びには断然有利である。

表1に、兄弟ともいえるこの2機種のパームトップパソコンのスペックを示す。

HP200LXよりもかなり薄い……

今回購入したPTP-20の商品構成は、以下のとおりである(写真3)。

- ・PTP-20本体(シリアル・ナンバー PA00110303)
- ・シリアル/パラレルポートアダプタ
- ・単三アルカリ乾電池2本
- ・CR2025リチウムボタン電池1個
- ・ユーティリティソフトFD1枚(インターリンク)
- ・ユーザーズマニュアル
- ・ソフトウェアガイド

PTP-20を手を持ってみてまず感じることは、その薄さである。HP200LXよりもかなり薄い(写真4)。パームトップパソコンというよりは、電子手帳といった感じである。ボタンタイプのキーボード(写真5)は、思ったよりも押しやすいが、キーストロークがほとんどないため、タッチタイピングはやはり苦しい。

通常のキーボードと異なっているところは、バックslashキー(\)が、スペースバーのすぐ隣りに位置している点だが、これは慣れてしまえばかえって使いやすい。

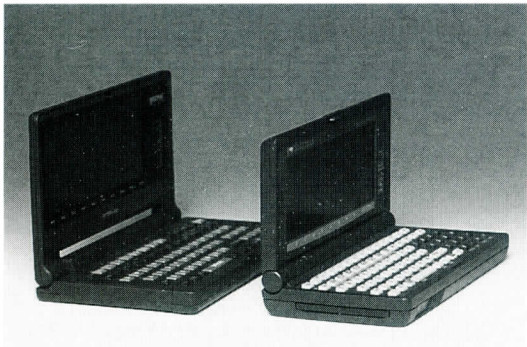


写真4 PTP-20(左)とHP200LXの厚さを比較してみる



写真5 PTP-20のキーボード



写真6 LCDディスプレイの右横にあるステータスインジケータ

い。

PIMが内蔵されているため、キーボード上部に専用のキーが並んでいる。内容は、左から順にDOS、TEL、MEMO、DIARY、TIME、CAL、CARD、SET UPとなっている。このあたりは、HP200LXをかなり意識してつくられているようだ。

LCDディスプレイ(注4)は、HP200LXのそれよりも、横幅がわずかに大きい。また、ディスプレイの右側には、ステータスインジケータ(写真6)が設けられているのも特徴的だ。ここには、バッテリーの状態表示や、カードの挿入状態表示、ファンクションキーやシフトキーの押し下げ状況などが表示される。

PCMCIAスロットは、本体右側に位置しており(写真7)、LOCKキーを開放してからイジェクトするようになっている。本体左側には、シリアル/パラレルポートアダプタを接続するための専用の80ピンコネクタが付いている(写真8)。ここにアダプタ(写真9)を接続すると、PC/AT標準の9ピン・オスのシリアルポートと、25ピン・メスのパラレルポートが接続できるようになる。

シリパラ機能を使用する際には、アダプタを接続しなくてはならないので若干不便だが、これは本体の大きさを考えると、致し方ないであろう。また、本体後ろ側には、DC 9VのACアダプタを接続するためのジャック

波多利朗の Funky Goods

注2)兄弟みたいなものであるが

兄弟というには、あまりにも性格が異なっているようにも思える。設計思想が根本的に異なっているからであろう。拡張性を採るか可搬性を採るかで、選択は変わってくるはずだ。

注3)タイピングはかなり困難である

実際に使用してみると、ミスタッチが若干多めである。クリック音をONにしておく、比較的入力ミスが少なくなるが、静かな会議室でメモを取るような場合には不向きである。

注4)LCDディスプレイ

HP200LXと比較すると、大きいだけでなく、明るく見やすい感じを受ける。なお、バックライトは当然ながら付いていない。



写真7 (左から)IC カードスロット、イジェクトキー、LOCKボタン

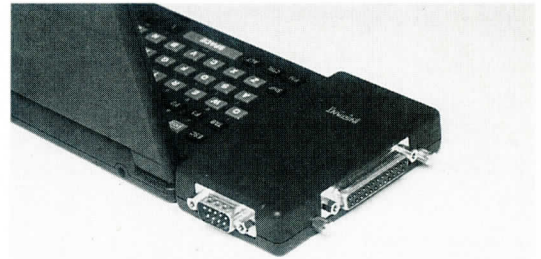


写真9 PTP-20専用のシリアル/パラレル拡張アダプタボックス

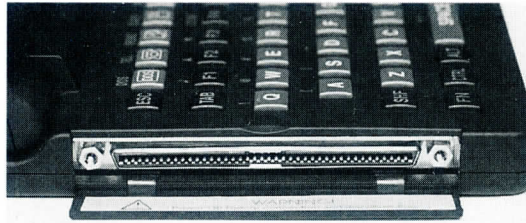


写真8 本体左側にある、拡張ポートアダプタ接続用コネクタ

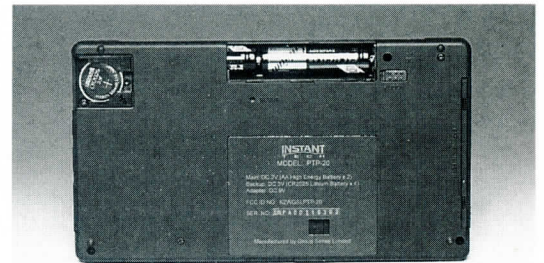


写真10 PTP-20本体の裏面

が設けられている。

本体裏面には、バックアップ用のCR2025リチウムボタン電池と、メイン電源である単三乾電池を格納する場所が設けられている(写真10)。

兄貴のPTV-30よりも高速

次に、PTP-20の基本的な性能を、簡単なベンチマークテストで調べてみた(表2)。参考として、兄貴であるPTV-30と、筆者がいつも使用しているクロックアップされたHP200LXの値も併記しておく。

PTP-20はV20CPUを14MHzで駆動しているため、PTV-30よりも高速という結果が出た。これは実際に両者を使用してみると、体感することができる。PTV-30よりもPTP-20のほうが、サクサクと動作するように感じられるのだ。

テスト項目	PTP-20	PTV-30	HP200LX (Colck Up)
SPEED200.EXE Landmark Speed Test			
・CPU	5.80MHz	4.87MHz	9.14MHz
・FPU	N/A	N/A	N/A
・Video	984chr/ms	407chr/ms	2715chr/ms
CPUBENCH			
・Ratio to the first PC9800	2.99	2.42	4.01
・Execute Time	23.06	28.54	17.19
DBENCH			
・Execution Time	311Sec	—	210Sec
・Dhrystones/Second	964.63	—	1428.57
・PC-9801DA 2 (386/20M)ratio	0.22	—	0.32

◎表2 PTP-20の基本性能

とにかく、外形は小さいが、そこそこのパフォーマンスを持つパーマトップパソコンだといえそうである。

PTP-20の動作

今回購入したPTP-20は、2MBのモデルである。メモリの使用状況を、表3に示す。

電源を投入すると、まず最初にROMドライブであるCドライブのCONFIG.SYSファイルを実行し、次にもしRAMディスクであるDドライブにもCONFIG.SYSが存在すると、それを続けて実行する。Cドライブに入っているAUTOEXEC.BATファイルは、もしDドライブに同名のファイルが存在しない場合は実行されるが、DドライブにもAUTOEXEC.BATファイルがあるときは、Dドライブのほうを優先して実行する。

ROMドライブに予め格納されているCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATの内容を、リスト1およびリスト2に示す。なお、ROMドライブであるCドライブの容量は、約530KB程度となっている。

メモリカードを使用しない状態だと、ユーザーが使用できるメモリは、Dドライブとして確保されている1344KBだけとなる。

・System Memory	640KB
・Video	32KB
・RAM Disk	1344KB(Dドライブとして設定されている)
・PIM Data	32KB
TOTAL	2048KB

◎表3 PTP-20(2MBモデル)のメモリの使用状況

```

device = dosYsetver.exe
device = carddrv.exe
device = ms-flash.sys
device = dosYinterlnk.exe /drives:8
device = pop.sys
stacks = 9,512

```

◎リスト1 Cドライブのconfig.sys

```

@echo off
prompt $p$g
path = c:\y;c:\y\dos;c:\yapps;d:\y;c:\yalite
set tmp=d:\y
set temp=d:\y
set alite=c:\yalite
break on
if exist d:\y\pim\tasks.cfg goto launch
md d:\y\pim
copy c:\yapps\tasks.cfg d:\y\pim
copy c:\yapps\ydclock.pim d:\y\pim\ydclock.pim

:launch
if not exist d:\y\autoexec.bat goto install
d:\y\autoexec

:install
doskey
call c:\y\pim
newzooom
cls
dir

```

◎リスト2 Cドライブのautoexec.bat

Cドライブに予め内蔵されているCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATを実行した状態では、PTP-20に内蔵されているPIM機能が使用できる状態になっている。PIMの各機能は、キーボード上部に配置されたキーで呼び出して使用する。これらの機能のうち、SET UP機能では、システムの各状態を設定することができる(写真11)。

ここでは、メインバッテリーの状態、キークリック音のON/OFF、ブートドライブの指定、CPUクロックの設定、シリアル/パラレルポートのON/OFFなどの設定が可能である。

PTP-20では、キーボードが押しにくいこともあって、デフォルトではキークリック音が出るように設定されている。また、CPUクロックとしては、14MHzのほかにも7MHzが設定可能だ。

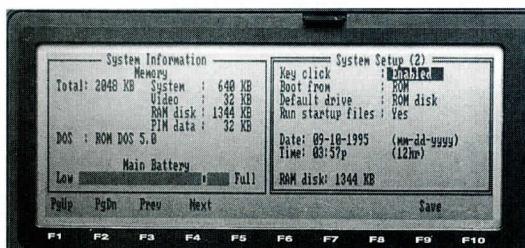


写真11 PIMに内蔵されているSET UP機能画面を呼び出したところ



写真12 PreMax社製 2 MB SRAMカード

波多利朗の
Funky Goods



写真13 STACKER Ver3.0

SRAMカードの導入とSTACKER

メモ리카ードを使用しないと、内蔵の1.3MBのメモリしか使用できず、心許ない。そこで、2 MBのSRAMカードを導入してみることにした。今回使用したSRAMカードは、PreMax社製(写真12)のものである。また、2 MBの容量では少ないと思われたので、今回はこのSRAMカードにSTACKER(写真13)(注5)をかけて容量をアップしてみることにした。以下は、その手順である。

①SRAMカードのフォーマットを行う

まず最初に、DOSのフォーマットコマンドを用いて、SRAMカードのフォーマットを行う。今回は、筆者がいつもサブマシンとして使用しているHP社製サブノートパソコン、Omni Book600Cを用いて、カードのフォーマットを実行した。

②STACKERに必要なファイルを、内蔵RAMディスクに格納する

今回は、STACKER Ver3.0を使用した。PTP-20のDドライブ(RAMディスク)に、STACKERというディレクトリを作成し、そこに下記のSTACKERファイルを転送する。

- ・SCREXEC.EXE
- ・SCREXEC 2 .EXE

注5)STACKER

小容量メモ리카ードユーザー御用達のディスク圧縮ツール。アメリカSTAC社の製品である。今回使用したのは英語版のSTACKER3.0 FOR WINDOWS AND DOSで、秋葉原ぶらっとホームで1万7600円で購入した。

- ・SCREATE.SYS
- ・STACKER.COM
- ・SSWAP.COM
- ・CREATE.COM
- ・CHECK.EXE

以上のファイルの総容量は、約310KB程度である。

③DドライブにCONFIG.SYSファイルを作成する

STACKER用のドライブを組み込むため、DドライブのルートディレクトリにCONFIG.SYSファイルを作成し、その先頭で以下のドライブを記述する。

```
device=d:¥stacker.com/M=0 E:¥stacvol.dsk
device=d:¥stacker¥sswap.com E:¥stacvol.
dsk
```

ここで、1行目は、STACKERドライブとしてEドライブを定義し、バッファとしてメインメモリを使用しない(/M=0)ということを示している。また、2行目はSTACKERとして割り当てられたドライブに、論理ドライブ番号であるEが実際に割り当てられるまでの間、このドライブをEドライブとして定義することを示している。

④STACKERボリュームを生成する

PTP-20上で、以下のコマンドラインを実行し、STACKERボリュームを生成する。

```
CREATE E:/R=3 /C=4
```

ここで、R=3は、最大圧縮率を3:1に設定することを意味している。またC=4はクラスタサイズの設定を行っている。クラスタサイズは、4、8、16、32のなかから選択することができるが、今回は比較的小容量のファイルが多いので、小さい値を設定しておいた。以上の処理で、EドライブにSTACVOL.DSKという仮想ボリュームが生成される。

⑤マシンをリポートする

前にも述べたように、PTP-20では、最初にCドライブのCONFIG.SYSを参照し、次にDドライブのCONFIG.SYSを参照する。したがって、Dドライブで記述したSTACKERのデバイスドライブも、問題なく組み込まれることになる。

—以上でSTACKERの組み込みは終了である。筆者のマシンでは、だいたい1.4倍程度の容量増加となっている。したがって、2MBのSRAMカードで3MB弱の容量が使用できることになる。

▶ PTP-20の日本語化に挑戦

メモリも拡張できたので、今度はPTP-20の日本語化を行ってみることにする。今回は、ディスプレイドライブとして、yadc.EXE(Yet Another Disp/C Ver0.9.5)

を、またフォントマネージャとしてfontman.EXEを使用することにした。フォントは、オカヤ・システムウェアのHP200LX日本語化キットに入っているものを使用した。また、日本語フロントエンドプロセッサにはWX 2 Ver2.70を使用した。

組み込み手順を以下に示す。

①フォントファイルを格納する

フォントファイルをSTACKERドライブに格納してしまうと、読み出しに時間がかかるので、PTP-20内蔵のRAMディスクに格納する。Dドライブにフォントディレクトリを作成し、そこに下記ファイルをコピーする。

- ・LXHN16X.FNT
- ・LXZN16X.FNT
- ・LXHN11X.FNT
- ・LXZN11X.FNT
- ・LXHN08X.FNT
- ・LXZN08X.FNT

以上のフォントファイルの合計容量は、約500KB程度である。

②ディスプレイドライブ類を格納する

EドライブにDOSCというディレクトリを作成し、その下に必要なディスプレイドライブ類を格納する。

- ・FONTMAN.EXE
- ・FONTMAN.INI
- ・YADC.EXE
- ・YADC.INI
- ・ANSI.SYS
- ・KKCFUNC.SYS

上記ファイルのうち、ANSI.SYSとKKCFUNC.SYSは、PC DOS5.0/Vに入っているものを使用する。以上のファイルの合計容量は、約60KB弱である。

③FONTMAN.INIの修正を行う

FONTMAN.INIのFONTX 2 フォント定義セクションに、今回使用するフォントを定義する。以下に例を示す。

```
; fontx 2 フォント定義
;
[fontx 2]
d: ¥font¥l\xhn08x.fnt
d: ¥font¥l\xhn11x.fnt
d: ¥font¥l\xhn16x.fnt
d: ¥font¥l\xzn08x.fnt
d: ¥font¥l\xzn11x.fnt
d: ¥font¥l\xzn16x.fnt
```

④WX 2 関連ファイルを格納する

EドライブにWX 2 ディレクトリを作成し、そのなかに下記ファイルをコピーする。

- ・WXX.SYS
- ・WX 2.DIC
- ・WXXC.SYS
- ・WX 2 D.SYS
- ・WX 2.SYS
- ・WX 2 SYS.INI
- ・WX 2.CFG

以上のファイルの合計容量は、約1.3MB程度となる。

⑤CONFIG.SYSファイルを修正する

DドライブのCONFIG.SYSファイルに、以下のドライブ類を登録する。

```
device=e: ¥doscfontman.exe -d -fe: ¥doscfontman.ini
device=e: ¥doscfyadc.exe -b+ -bd -v70 -h16
device=e: ¥doscfkccfunc.sys
device=e: ¥doscfansi.sys
device=e: ¥wx 2 ¥wxk.sys
```

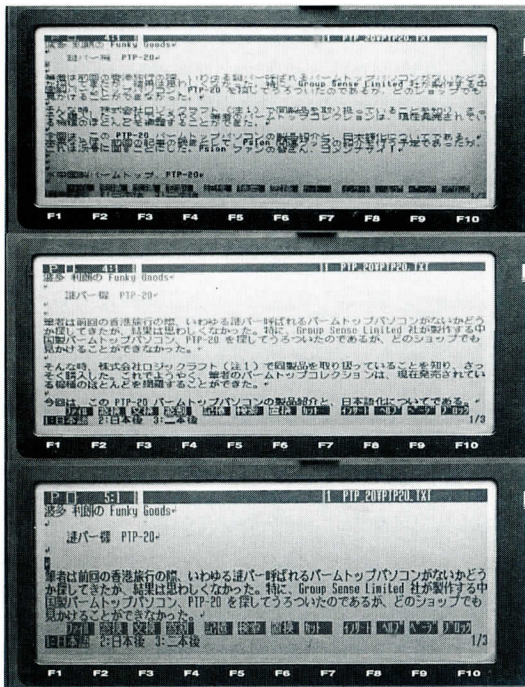


写真14 PTP-20上で使用できる3つのサイズのフォント

```
device=e:Ystacker.com /M=0 E:Ystacvol.dsk
device=d:YstackerYsswap.com E:Ystacvol.dsk

device=c:¥doscffontman.exe -d -fe:¥doscffontman.ini
device=c:¥doscfyadc.exe -b+ -bd -v70 -h16

device=c:¥doscfkccfunc.sys
device=e:¥doscfansi.sys

device=e:¥wx2¥wxk.sys
device=c:¥wx2¥wx2.sys /De:¥wx2¥wx2.dic /VF /N
```

◎リスト3 Dドライブのconfig.sys

```
device=e: ¥wx 2 ¥wx 2.sys /De: ¥wx 2 ¥wx 2.dic /VF /N
```

⑥マシンをリポートする

—以上で、PTP-20に日本語環境を構築することができる。

なお、参考までに筆者のDドライブのCONFIG.SYSファイルとAUTOEXEC.BATファイルの内容を、リスト3およびリスト4に示す。

ここで構築した日本語環境では、日本語フォントのサイズを3段階に切り換えることが可能である(写真14)。この操作を行うために、CHEV.BATというバッチファイルを作成した。

CHEV.BATの内容を、リスト5に示す。表4に、設定できるフォントサイズとCHEVコマンドとの対応を示す。

```
@echo off
prompt $p$g
path= c:¥c:¥dos;c:¥apps;d:¥c:¥alite:e:¥d:¥vz:e:¥dos;c:e:¥bin;
```

◎リスト4 Dドライブのautoexecbat

```
@echo off
if "%1"=="jp" goto jpn
if "%1"=="JP" goto jpn
if "%1"=="jc" goto cjpn
if "%1"=="JC" goto cjpn
if "%1"=="jl" goto ljpn
if "%1"=="JL" goto ljpn
if "%1"=="us" goto usa
if "%1"=="US" goto usa
goto man

:man
echo USAGE: CHEV JP --- switch to VTX Japanese mode(11dot)
echo CHEV JC --- switch to CGA Japanese mode( 8dot)
echo CHEV JL --- switch to VTX Japanese mode(16dot)
echo CHEV US --- switch to English mode(80x25)
goto end

:jpn
yadc -jp -v70 -h11
goto end

:cjpn
yadc -jp -v73
goto end

:ljpn
yadc -jp -v70 -h16
goto end

:usa
yadc -jp -v73
yadc -us -v3
goto end

:end
```

◎リスト5 CHEV.BATの内容

注 6) KERNEL.EXE を実行させればよい

これを常駐させると、当然コンベンショナルメモリを使用するので、設定を変更する場合や、PIMを使用する場合以外は常駐しないほうがメモリを空けることができる。



写真15 PTP-20にOMRON製のポケットモデムを接続しているところ

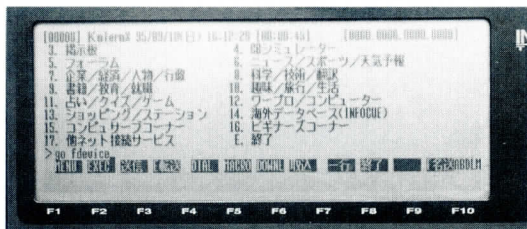


写真16 PTP-20上でKTXを使用してNIFTY-Serveにアクセスしているところ

PTP-20を使ったパソコン通信

日本語環境が構築できたので、次にモデムを接続してパソコン通信を行ってみることにする。PTP-20本体にはD-Sub 9ピン・オスのCOMポートが直接出ていないため、付属のシリアル/パラレルポートアダプタを使用してモデムを接続する。シリアル/パラレルポートアダプタは、PTP-20本体左側の80ピンの専用コネクタを介して接続する。アダプタ自体は、ただ単に専用コネクタをD-Sub 9ピンのシリアルポートとD-Sub 25ピンのパラレルポートに変換しているだけのものである。

このシリアルポートに、今回はOMRONのポケットモデム、MD24FP 5Vを接続した(写真15)。通信ソフトは、ファイル容量が少なく比較的軽いKmTermX (KTX) Ver1.26を使用した。必要なファイル容量は、約360KB程度である。初期設定としては、KTX.CNFファイルのディレクトリ指定の項目でパスの設定を行い、通信環境指定の項目でポート番号を1に設定する程度である。

PTP-20本体側の設定としては、シリアルポートをイネーブルにする必要がある。これは、PTP-20のPIMの一部として内蔵されているSET UPで行う。リスト

コマンド	モード	半角文字サイズ	全角文字サイズ	yadcのパラメータ
CHEV JL	80桁×12行	8×16ドット	16×16ドット	yadc -jp -v70 -h16
CHEV JP	80桁×18行	8×11ドット	16×11ドット	yadc -jp -v70 -h11
CHEV JC	80桁×25行	8×8ドット	16×8ドット	yadc -jp -v73

◎表4 CHEVコマンドとフォントの対応表

3および4で示したCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATを使用して日本語環境を構築してしまうと、PIMを起動するためのドライバが組み込まれなくなるため、SET UPキーが効かなくなってしまう。したがって、手動でPIM用ドライバを組み込む必要がある。

方法は簡単で、英語モードにCHEVした後、CドライブのAPPSディレクトリ下にあるKERNEL.EXEを実行させればよい(注6)。これで、キーボード上部にあるSET UPキーを押してシステムセットアップ画面に入ることができる。

システムセットアップ画面で、シリアルポート(3f8hに設定されている)をイネーブルにすれば、COM1ポートとして使用できるようになる。

以上の設定で、外付けモデムを使用してパソコン通信を行うことができる(写真16)。

FEPにKatana(刀)Ver4.0を組み込む

前に述べた日本語化では、FEPにWX2+を使用した。今度はより軽いFEPとして有名なKatana(刀) Ver4.0を導入してみることにする。Katana(刀) Ver4.0は、サムシンググッドが発売する激安日本語ワープロ「NewオーロラエースDOS/V版」(写真17)(注7)などにバンドルされているFEPである。以下に導入方法を述べる。

①Katana(刀)をDOS/C環境で動作させるためのドライバおよびパッチファイルをダウンロードする

Newオーロラエースに入っているKatana(刀) Ver4.0は、そのままではDOS/C環境下で動作させることはできない。そこで、DOS/C環境で動作できるように、市販のファイルにパッチを当てる。

DOS/Cに対応させるためのKatanaのドライバおよびパッチファイルは、NIFTY-ServeのFHPPC LIB 11 #24に登録されているKTN 4 C103.LZHというアーカイブである。これを解凍すると、下記ファイルが出てくる。

- ・README.TXT
- ・KTN 4 C.SYS
- ・KTN 4 UP.COM

KTN 4 C.SYSは、DOS/C対応のドライバであり、KTN 4 UP.COMはKTN 4 .SYSにパッチを当てるための差分ファイルである。

②KTN 4 .SYSにパッチを当てる

Newオーロラエースに入っているKTN 4 .SYSと、①で入手したKTN 4 UP.COMを同一ディレクトリに入れてKTN 4 UP.COMを実行する。これでKTN 4 .SYSにDOS/C用のパッチが当たる。



写真17 NewオーロラエースDOS/V版のパッケージ

③Katana(刀)ファイルのコピーする

今回は、EドライブとなるSRAMカードに、必要なファイルをコピーする。

EドライブにKTN 4 というディレクトリを作成し、下記ファイルを転送する。

KTN 4 C	SYS	31355	95-07-15	4 : 09
KTN 4	SYS	32667	95-04-15	4 : 09
BSH	DIC	29696	94-07-01	4 : 09
KTNSMALL	DIC	410624	94-07-01	4 : 09
PHN	DIC	22528	94-07-01	4 : 09
TMP	DIC	50	94-07-01	4 : 09
USR	DIC	3072	94-07-01	4 : 09
ZIP	DIC	18432	94-07-01	4 : 09
KTN 4	CFG	397	95-08-19	11 : 08
KTN 4 KEY	CFG	3571	94-07-01	4 : 09

上記ファイルのうち、KTN 4 C.SYSはダウンロードしたアーカイブに入っていたものであり、また、KTN 4 .SYSは②でパッチを当てたものである。なお、上記ファイルの合計容量は、約550KB程度である。

④KTN 4 .CFGファイルを編集する

KTN 4 .CFGファイルを使用するマシンの環境に合わせて編集する。ここでは、辞書定義パスやキーボードタイプの設定を行う。

⑤DドライブのCONFIG.SYSファイルを修正する

PTP-20のDドライブに置くCONFIG.SYSファイルを修正する(リスト6)。

今回は、Katana関係のファイルをEドライブに格納したため、CONFIG.SYSファイルに下記の2行を追加する。

```
device=e: ¥ktn 4 ¥ktn 4 .sys /F=E : ¥KTN 4
¥KTN 4 .CFG
device=e : ¥ktn 4 ¥ktn 4 c.sys /F=E : ¥KTN
4 ¥KTN 4 .CFG
```

⑥マシンをリブートする

以上の処理で、KatanaをFEPとして使用できるよ

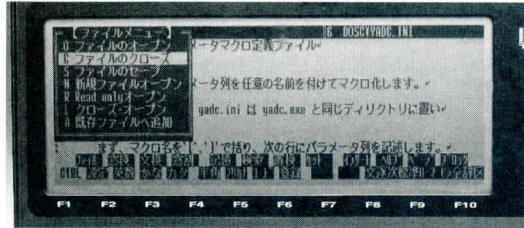


写真18 Katanaを使用してエディタで文章を入力している(エディタはVz)

うになる。ちなみに、EドライブにSTACKERをかけた場合でも、正常に動作させることができた。WX 2 +と比較してKatanaは必要となるファイルの容量が少ないので、格納するメモリに余裕がない場合には有効である。

また、Katana自体がWX 2 +と比べて軽いため、操作性もなかなかのものである(写真18)。

*

いままでいろいろと謎パー機を使ってきたが、このPTP-20は、デザインと可搬性という点では出色の出来だと思っている。

確かに会議で議事録をビシバシ取るにはキーボードが小さいし、外ツェを行うにはPCMCIAスロットが少ない。また、HP200LXのように、完全に日本語化されたPIMが内蔵されているわけでもないが、ちょっとメモを取る程度には十分使用に耐える。

なによりも、他に使っている人がほとんどいないという希少性がよい。

筆者は、もはやマニアの持ち物でもなくなり、面白くもなんともなくなってしまう、超優等生パームトップパソコンHP200LXよりも、なんだかよくわかんない奴だが、付き合ってみると結構面白いといった感じのPTP-20のほうが好きである。

パソコンライフにひねりをきかせてみたい、と思っている方は、購入してみたいはかかだろうか？

```
device=d:YstackerYstacker.com /M=0 E:Ystacvol.dsk
device=d:YstackerYsswap.com E:Ystacvol.dsk

device=e:Ydoscyfontman.exe -d -fe:Ydoscyfontman.ini
device=e:Ydoscyadc.exe -b+ -bd -v70 -h16

device=e:Ydoscykckfunc.sys
device=e:Ydoscyansi.sys

device=e:Yktn4Yktn4.sys /F=E:YKTN4YKTN4.CFG
device=e:Yktn4Yktn4c.sys /F=E:YKTN4YKTN4.CFG
```

◎リスト6 Katanaを使用した場合のDドライブのconfigsys